



母校での教育実習記

生徒に助けられた授業

高校の先生に対する感謝の気持ち、同時に僕に「先生」という職業への憧れを抱かせ、中央大学で教育課程を履修する結果になった。そして4年生のことし9月、教育実習を体験した。しかも実習する学校は、僕の母校である広島市の市立高陽中学校である。

高陽中学は市内の中心地から40分ほどの場所にある。緑に囲まれた環境は中央大学と一緒だ。「僕がいた頃と、学校の雰囲気は変わっているのだろうか」。そんな思いを抱きつつ校門をくぐった。

(学生記者・中村昌太郎)

実習初日は9月1日。さすがに緊張した朝だった。しかし、「最近の中学生は荒れている」という心配は、2年B組の教室に向かう途中の廊下で、かき消された。何人かの生徒が、大きな声で「よろしくお願ひします!」と挨拶してくれた。これは嬉しかった。緊張はいっぺんにほぐれた。反射的に「こちらも「よろしく」と答えた。

僕の指導教諭は2・1B担任で国語の大谷由起先生である。1週目は大谷先生の授業を中心にたくさんの授業を見学した。特に来週からは僕の授業実習が始まるので、大谷先生の授業は熱心に見学した。授業の進め

方、朗読の仕方、板書の書き方など、とても参考になった。生徒からは活発な意見が出るので、普段静まり返った大学の講義を受けている僕の中には少なからず新鮮に映った。音楽の授業では「2・1B」のきれいな合唱を聞いているうちに「若い感性ってすごいな」と感激、思わず涙ぐんでしまった。

甘くなかった

授業の進行

数日のうちに、生徒たちはほとんど話しかけてくれるようになった。昼食は生徒と席を並べたが、食べるのが一番遅い僕は、よく彼らからか

らかわれた。昼休みには生徒たちがそばに来て、いろいろな話をしてくれる。どんな些細なことでも楽しそうに話してくれるのが嬉しかった。

高陽中の生徒は挨拶のマナーが素晴らしい。僕は実習の間、サッカー部に加わったが、そこでも気持ちのよい応対を見せてくれた。練習日の初日には、部員全員が横一列に並んで「よろしくお願いします！」と大声で言ってくれた。僕は、そんなに上手くないので、こちらが恐縮したくらいだった。

ついに2週目がやってきた。2学年全3クラス。それぞれ4時間の授

業を担当した。教材は太宰治の『走れメロス』。僕にとって太宰治は特別に思い入れのある作家だ。グジグジと思い悩んでいた高校時代は『斜陽』から、前に進む力をもらった。『文学作品の素晴らしさを、ぜひ伝えたい』——そんな願いをもつて授業に臨んだ。

ところが授業の進行はそう甘くはなかった。生徒の意見を聞いて、授業を進めていこうと計画したが、その意見がまったく出なかったり、あるいは出すぎて收拾がつかないこともあった。時間の配分も難しく、慌てて終わらせたり、逆に余らせたり

……。せつかく発言した生徒の意見を生かせないこともあった。初めての授業だから上手くいかないのは当たり前かもしれないが、いまでも悔やまれる。

ただし、生徒の前で授業をすることは楽しかった。いつしか各クラスの教室に向かうことを楽しみにしている自分が生まれた。生徒たちはよく話を聞いてくれたし、目の覚めるようなハツとする意見を出してくるから、こちらが勉強になることはしばしばだった。結局、12時間の授業は、生徒に助けられた授業、だったと痛感する。

「僕らは先生の応援団じゃけん」

実習最後の日は、さすがに感傷的な気分だった。「もう終わりか。寂しいな」。心に穴が開いたような妙な心持ちだった。いつもと同じように、昼食は僕が一番最後だった。なんだか、あすも学校へ来てしまいそうな気分がした。6時間のHRでは大谷先生から時間をいただき、僕が話をすることになった。テーマは「自

分の高校時代について」。

「高校時代、出口のないような悩みの中で、僕を支えてくれたのは先生であり、心を開ける人だった。大げさだが、それは文学であり、時には音楽であった。みんなも苦しいときに、自分を支えてくれる存在を持つたらいいと思う。そして、どんなことでも自分の好きなことを見つ

けてそれに取り組んでほしい——たどたどしくも、そんなことをしゃべった。

最後に「21B」の生徒がお別れ会を開いてくれた。みんなで書いたメッセージを贈ってくれた。そして1人の生徒が、机の中から1本の花を取り出し、「いい先生になってください」との言葉を添えて、その花

を僕にくれた。次から次へと生徒が立ち上がり、最後の生徒の順番になった頃には、両手で抱えるような花束になっていた。写真。

ただただ呆然としてみると、生徒は僕の前に全員整列した。そこへ電子ピアノが運ばれ、『あの素晴らしい愛をもう一度』の合唱が始まった。胸が詰まって言葉はなかった。その歌声はまだ心に響いている。

生徒の言葉に 胸が痛むほど

「授業 面白かったよ」「先生！僕らは先生の応援団じゃけん」といつてくれた高陽中の生徒たち。みんなと過ごした2週間は、僕にとって掛けがえのないものになった。いくら感謝しても感謝し足りない。教職課程を履修したきっかけは、先生という職業に憧れた程度のものであった。

しかし、「絶対に先生になってね」といつてくれた生徒の言葉は、胸が痛いほどうれしかった。みんなが贈ってくれたメッセージは、教育実習の思い出とともに、いつも傍に置いてある。